

2007年10月発行
No.61

三到図書館 ニュース

J. F. Oberlin University Library

インターネットと図書館の利用について
1000人の図書館ツアー
図書館ガイダンス・2007年度前期報告

学生はどのように本を読んでいるのか
読書会は楽しい！
読書運動プロジェクト

巻頭
言■

インターネットと 図書館の利用について

図書館長 永瀬 順弘



私は、この4月に図書館長に就任することになりました永瀬と申します。LA学群で経済史、日本経済史を担当することになっております。4月に発行された「三到図書館ニュース」の内容が先に決まっていたため、ご挨拶が遅れましたことをここにお詫び致します。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

現在桜美林大学の図書館では、新しい教育・研究組織の改編に伴い、難しい問題を多々抱えておりますが、今回はその件については全て省略し、学生、大学院生の皆さんに、「インターネットと図書館の利用について」お話ししておくことにしたいと思います。

最近、私は首都圏の大学の「図書館研修会」に参加して、驚くべきニュースを聞きました。それは、ネットのGoogle社がアメリカのハーバード大学やミシガン大学等で、図書館所蔵の資料・文献のデジタル化を進め、近い将来夢のデジタルライブラリーが実現するかも知れないということでした。日本でも慶応大学の図書館が、同じGoogle社に依頼して、10万冊くらいの資料・文献のデジタル化に入ることになったというニュースがこの7月に流れましたし、既に国会図書館をはじめ様々な研究機関で資料・文献のデジタル化が進み、資料の閲覧もインターネットで便利に利用出来るようになってきています。いよいよ日本もそういう

時代に突入しつつあるのか、という感を強く持ちました。

しかしここには多くの問題があります。例えばこうしたデジタル化された文献・資料が公開利用できるようにするためには、著作権問題等が絡んでいて、何でも自由に利用出来るようになるとは言えないということです。国会図書館などで公開されているものも多くは著作権問題をクリアしたものが中心で、最新の文献や資料までは利用が難しいということです。私のように歴史を研究している者にとっては大変ありがたいことですが、最新の文献やデータを利用する必要がある人にとってはどこまでデジタル化の御利益にあずかることができるのか定かではありません。

ところで、最近の学生が書く論文やレポート、卒業論文などを読んでいて、私には大変気になることがあります。それは学生達が余りにもインターネットに頼りすぎ、典拠や註もハッキリと明示せずに安易に利用している傾向があるということです。インターネットによる文献検索や各種のホームページなどは、問題の「概要」などを把握するうえでは大いに力を発揮してくれますし、コンピュータの技術進歩は大いに利用されてしかるべきだと思います。しかし「内容の深さ」を求める場合、少なくとも現段階ではどうしてもインターネットだけに頼ることは難しいし、危険もあります。このことをインターネットの利用にあたっては学生や大学院生の皆さんには充分自覚していただきたいということです。どうか学生や大学院生の皆さんも、インターネットの利用による利点を生かしつつも、余りにそれに頼りすぎることは止め、自分自身で図書館に足を運び、「書かれた文献・資料」に直接あたっていただきたい、ということを私は強く要望したいと思います。是非図書館で、アナログの深みのある世界にも接して下さることを願っております。

利用
指導1000人の
図書館ツアー

リベラルアーツ学群教授 福嶋 輝彦

昨年11月にリベラルアーツ・セミナーという、新学群の基礎的学術スキル向上のための演習科目の立案を突然任された。将来何を専攻するかバラバラの新入生約1000人を、それをこれまた専門がまったく異なる約70名の教員が担当する必修科目の授業計画案を、2、3ヵ月内に作成せよという途方もないミッションであった。しかし、坪田幸政教授、鬼丸朋子准教授、多々良直弘講師の力を借りて、私たち作業部会は2月には何とか授業ガイドラインを取りまとめることができた。

ガイドラインでは、最低限の共通基準を提示するに留め、後は各教員の裁量に任せる形を取った。ところが、オプションとして提案しておいたにもかかわらず、ほぼ全教員が図書館ツアーを実施するとの回答を寄せてきた。図書館ツアーは、授業のなるべく早い段階で実施したほうが教育上望ましいため、ここで70近くのクラスを限られた期間内でいかにツアーガイドするかという難問に直面することになった。授業は月火木金のいずれも5時限に組まれているが、第7週までに全クラスのツアーを終わらせるだけでも、1回のツアーの時間帯に3クラスを張りつけなければならない。

1クラスが平均16名だから、50名近くの学生が一度に図書館の中を渡り歩くことになれば、周到的計画を立てない限り大混乱に陥るのは目に見えていた。

そこで、図書館スタッフと相談を重ねた結果、3クラスをPC教室での検索実習から開始する2組と図書館本館ツアーから開始する1組に振り分け、それを途中で入れ替えることで切り抜けることにした。ところが、予想外の問題が起こってしまった。5時限目の授業ということで楽観視していたら、何と木曜日にはPC教室が一つも空いていないとのことであった。各方面に手配した結果、漸く情報実習室を使わせてもらうことになったが、使用できるコンピュータの数がPC教室よりも少なく、思わぬ不便をかける結果となってしまった。

とはいえ、図書館スタッフと先生方のご協力によって、1000人を超えるリベラルアーツ学群の図書館ツアーは、大きな混乱もなく無事完了することができた。今後の課題として、他学群の図書館ツアーとの重複による混雑の克服、PC教室の確保、検索実習での指導内容のいっそうの充実などの問題が残されていると思うが、筆者のクラスでも学生のほぼ全員が、図書館のウェブサイトからデータベースを駆使して、雑誌論文や新聞記事を検索できるようになった。これも当初からこのツアーの調整を担当していただいた、高橋瑞江さんを始めとする図書館スタッフの献身的な協力のおかげである。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

前期
報告図書館ガイダンス
2007年度前期報告

今年度よりリベラルアーツ学群が開設され、新入生を対象としたリベラルアーツ・セミナーが開講されました。図書館ガイダンスもカリキュラムの中に組み込まれ、今年度はパソコン教室を使って、蔵書検索やデータベース検索の説明と検索実習、および図書館ツアーを行いました。

また、ビジネスマネジメント学群も新入生を対象に、授業のなかでガイダンスを行いました。そのほか、国際学部や言語コミュニケーション学科等についても2年生を対象に、情報検索を主体としたガイダンスを実施しています。

右記の表にあるように年々ガイダンスの実施回数、参加人数は増加しています。学生の勉強にとって本や雑誌だけでなく様々な資料が必要とされ、それらを入

手するための知識が要求されていると思われます。

今後も引き続きガイダンスの申込みを受け付けます。個人参加のガイダンス、ご希望やレベルに応じたガイダンスも行っています。お気軽にお申込みください。

(情報サービス係 矢部)

	実施クラス	参加人数
2004年度	56	721
2005年度	76 (136%)	970 (135%)
2006年度	96 (126%)	1,206 (124%)
2007年度	104 (108%)	1,594 (132%)

()は前年比

お問い合わせ:情報サービス係
(内線4122) Tel:042-797-9992 (直通)

読書意識 学生はどのように本を読んでいるのか？

桜美林大学における学生の読書意識と読書へのアプローチ

事務課図書係 佐々木 俊介

1 読書が好きな大学生、嫌いな大学生

毎日新聞読書世論調査2007年版の統計によれば、10代後半の読書率は、書籍を「読む」が48%、書籍を「読まない」が50%、20代では書籍を「読む」「読まない」がともに49%という結果である。現代の学生が読書離れの傾向にある、ということは、マスコミや研究者などが行なう各種読書調査などで毎年指摘されている。学生をとりまくWeb環境もまた毎年のように変化し、まさに情報の洪水といえる現在、桜美林大学の学生が、読書に対してどのような意識を持っているのか、本を（活字を）読むということに、どれだけの意義を見出しているのかを探るために、簡単なアンケートとヒヤリングを行い、大学生の読書に対する考えや意見を直に聞いてみた。その結果、本を読む意欲のある学生は放っておいても読み、本を読む意欲のない学生は放っておいたらいつまでも読まない、という感触を得ることができた。かれらの意見を要約すると次のようになる。

- ・ 読書する・しないにかかわらず、読書に対して否定的なイメージはほとんど抱いていないが、それでも積極的・能動的に読書しようとする学生は少数派。
- ・ 本を読まない理由は「忙しくて時間がない」「習慣がない」が多い。本を読むきっかけは「授業・レポートで必要に迫られて」というのがトップ。
- ・ 本の情報を得るのは書店・生協・コンビニでの立ち読みとインターネットがほとんど。雑誌や新聞の書評まで目を通すのは、少数派の本を読む学生。
- ・ 何を読めばいいのかわからない。面白いのかわからない。理解できないとつまらない・・・だから読んでみようと思わない。

それでも直接意見を聞いてみると、周りの誰か（友人、教員など）が面白そうな本をなんらかのかたちで紹介・推薦してくれたら、読むきっかけになるという声が目立った。きっかけを求めている学生が潜在的に多く存在するなら、図書館でもそれに対してなんらかのアプローチを行なうことも必要だろう。

2 大学図書館が学生に対して読書に興味を持たせる努力は必要か？

「大学生が本を読むのは当然だ」という意見は依然としてある。この意見は当然だと思し否定するつもりもない。それでも「本を読まない」「何を読めばいい

いかわからない」「本を読む習慣がない」と公言する大学生が多く存在する以上、誰かが読書指導を、あるいは興味を持たせることをしなければならないだろう。そしてそれは、学生に直接指導を行う教員と、多くの文献を所蔵し学生に提供する図書館が適任であると考ええる。

学生たちを読書に親しませる取り組みとして、昨年度から図書館読書運動プロジェクトを展開している。学生・教員・図書館員メンバーで生協の協力を得て読書会・上映会・講演会を企画・運営し、二年目を迎えた今年は少しずつ学生メンバーが集まりつつある。今年度は岡本太郎『今日の芸術』、ドストエフスキー『地下室の手記』、フロイト『精神分析入門』、村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を取り上げた読書会が開催されている。また、首都圏の大学の読書サークルを組織化しようという動きもあり、桜美林大学からも参加できないか、と考えている。

3 図書館には何がある？ 図書館には本がある。

少なくともこの10年間は、学部改組と専攻増加、各種オンラインサービスに代表される新しい図書館サービスの展開など、図書館は次から次へと新しい対応を迫られてきた。蔵書は増える一方で、新しいジャンルの資料も収集・提供しなければならない。これまで図書館は資料を収集・管理することに手一杯で、蔵書を活用するというにはなかなか着手できていない。大学図書館には、規模の違いこそあれ、多くの専門書・学術書・貴重資料が所蔵されている。資料保存という使命もあるが、せっかくの蔵書を眠らせておくのもまた、もったいないことである。ガイダンス、オリエンテーションを通じて利用指導を行うとともに、大学図書館の蔵書を利用者に紹介し、図書館の蔵書や施設を存分に活用させ、大学生の読書意欲を喚起することは、図書館ひいては大学全体を活性化させるための鍵となるであろう。

私立大学図書館協会 東地区部会 2007年度第1回研修会
テーマ：「蔵書を考える」発表原稿より



『新約全書』墨海書館、1859 桜美林大学図書館所蔵）
墨海書館（London Missionary Society Mission Press）は、1843年にイギリス人宣教師メドハーストが上海に設立した、中国で最初に中国語の活字印刷設備を備えた出版社。

読書
三到読書会は
楽しい！リベラルアーツ学群 1年
上田 康司

僕は今までたくさんの本を読んできました。ある時は壮大な歴史絵巻を、ある時は深遠な人間ドラマを、またある時は、なんでもないように過ぎていく、でもかけがえのない日常の物語を。

素晴らしい本と巡り合うのは本当に素敵な体験です。でも、今まではその感情を共有できる相手がいませんでした。友達に勧めても、マンガならともかく、分厚い本はなかなか読んでもらえません。本について話をしたくても、誰に話したらいいのかわからなかったのです。本が好きな人の中には、僕と同じような思いを抱いたことがある人が少なくないと思います。

今年の秋学期、桜美林大学では画期的な授業が行われることになりました。それは、片山博文先生による、

「学際・統合科学基礎(読書会で学ぶ)」というものです。学生たちが同じ本を読んできて、それについて語り合うという授業です。

第一回の作品は太宰治の『人間失格』でした。なので当然、皆がそれを読んでくるわけです。十六人もの『人間失格』読者が集まっている！ その状況自体が、なんと奇妙で、愉快なものでした。そしてこの作品について様々な意見や感想を出し合い、作品をさらに深く広く楽しむことができたのです。これは本当に楽しい時間で、大学では高校までとは違う、もっと自主的で創造的な勉強がしたいと思っていた自分にとって、すこぶる幸せな体験でした。なにより、自分が好きな本についてたくさんの人と話し合うことができたことに満足でした。まだこれからも、何度もそういう機会があるのだと思うと心が躍ります。

授業としての読書会とは別で、図書館の推進する読書プロジェクトにおいて誰でも参加できる読書会が毎月開かれていますので、もし興味を持たれた方がいらっしゃいましたら、ぜひ顔を出してみてください。今まで何度も読んだ作品でも、他者と語り合うことで違った魅力に気づくことができるかもしれませんよ。

読書
運動読書運動
プロジェクト

図書館ニュースでも、昨年から毎回紹介している読書運動プロジェクト。2年目の2007年度は、『人生は芸術だっ！ - 激しく、楽しく、美しく生きる』のテーマのもと、春学期の早々から、読書会を中心にすすめられています。

読書会では、岡本太郎の『今日の芸術』に始まって、村上春樹やフロイト、ドストエフスキーなどの著作を読み、参加者それぞれの思うところ、感じたところを述べあい、議論をたたかわせることもありました。

今年は、昨年以上に学生たちの積極的な参加があり、学生たちによって今後も新たな企画がすすめられていく予定です。図書館3階入口付近の読書運動プロジェクトコーナーも、学生たちの手によって一新されることになりました。この図書館ニュースが発行される時には、どんなコーナーになっているのでしょうか…！？

恒例の読書マラソンについては、コメントカードの総数1,000枚を目指そうという壮大な企画が、MRC (More Reading Club) のメンバーによってすすめられています。

年末には、読書マラソンの表彰式とあわせて講演会なども予定しています。内容については今後のお楽し

み…。

せっかくならば、講演会をのぞきに来るだけでなく、みなさんもコメントカードを出してみませんか！参加方法、コメントカードの提出方法はいたって簡単です。ひょっとしたら、みなさんの独創的なコメントが、コメント大賞に選ばれるかも…！？(コメントカードを出すだけなら、余計な費用もかかりませんので、お気軽に)「こんな本を読んだよ！」「この本はみんなにもぜひ読んでほしいな！」等々、本の感想や意見があったら、ぜひコメントカードを出してみてください。学生プロジェクトメンバーも募集中！

読書運動プロジェクトの学生メンバーも少しずつ増えてきました。こんな企画をやりたい、自分のおすすめの本をみんなに知ってほしい等、思いを秘めているみなさん、ぜひ参加してください。

〔連絡先〕e-mail : dokusho1@obirin.ac.jp

(情報サービス係 三上)

掲示板

10月から、図書館1階(雑誌フロア)にもレファレンスカウンターを設置しました。雑誌・論文情報検索等でお困りの方は、どうぞお気軽にレファレンス担当者に声をかけてください！3階レファレンスカウンターともども、みなさんの学習・研究支援にご活用ください。